

CHECK!

血液検査からわかること

アレルギー

原因物質(アレルゲン)を調べる目安に

一般的にはIgE抗体の量を測る血液検査で、症状の原因物質(アレルゲン)として疑いのあるものを探し、ほかの検査などと合わせて確定診断します。子どものころは何ともなかったのに、40代以上になって突然、アレルギー症状が出てくるケースもあります。それまでアレルギーの自覚がなかったとしても、じんましんやぜんそくのような症状が現れた時は、ぜひ受診して検査を。

風邪

より的確な診断や薬の処方に役立つ

風邪の原因は細菌でなくウイルスだから抗生物質は効かない、といわれます。ところがウイルスによる風邪で弱った体に、後から細菌が感染し、症状が一段と重くなることも。血液検査の結果、白血球が増えているれば細菌感染の可能性が大。その時は抗生物質が治療に有効です。少しだけ採血し、数分ほどで白血球数などを調べられる装置(血球計数器)を備えたクリニックもあります。

がん

早期発見には課題も多い

一般的なのは、血液中の腫瘍マーカーの検査。ただ「陽性でも、がんの臓器が特定できない」「進行していくも陰性になる」といった腫瘍マーカーもあるため、がんの早期発見には一部を除き、十分に有効とはいえない。現状ではほかの検査を経てがんの治療をおこなった後、治療効果の確認に腫瘍マーカーが用いられています。治療後数年間にわたって、腫瘍マーカーの推移を観察することもあります。

アルツハイマー

発症リスクを知るための目安の1つに

血液検査で遺伝子を調べ、将来、アルツハイマー型認知症を発症するリスクや、認知症の前段階とされる軽度認知障害(MCI)のリスクがわかります(どちらの検査も保険適用外)。残念ながら現在、認知症を完治させる薬は開発されていませんが※、認知症のタイプによっては治療可能な場合もあり、生活への影響を少なくできることがあります。

※認知症と似た症状を起こすほかの病気であれば根治も可能。

生活習慣病

検査結果が治療の指針に

生活習慣病は「サイレントキラー」と呼ばれ、たとえば脂質異常症や糖尿病は、自覚症状がないまま放置され、致命的な事態を招く危険さえあります。その静かなる敵の存在を、血液検査は早い段階で知ってくれるのです。また、検査結果により治療の指針(経過観察、食事療法、すぐに投薬など)も決まります。

栄養状態

肝臓でつくられるアルブミン(たんぱく質の一種)を主にチェック。低下している場合は、肝機能の悪化が疑われます。高齢者やがんに罹患している人も低下する傾向があります。

肝機能

異常が認められた場合は、ウイルス性肝炎などの検査をおこなうこともあります。肝臓は「沈黙の臓器」と呼ばれ、病気になってしまって自覚症状が出にくいため注意が必要です。

コレステロール

悪玉コレステロールの値が高い場合、運動や食事療法ではなかなか下がらない人が目立ちます。医師の判断で、早めに薬による治療をはじめることもあります。

血糖

空腹時血糖の検査が一般的ですが、食事から1時間後の血糖値が高い場合(140mg/dL以上)は、糖尿病予備軍。不安があれば、ブドウ糖負荷試験で確かめられます。

腎機能

本来、腎臓でろ過されるクレアチニンを主にチェック。筋肉量にも影響されるため、より適切な判定には年齢、性別、さらには体重の考慮も必要。医師の診断を仰ぎましょう。

痛風

血中の尿酸値をチェック。高くなる原因是、食生活または体质です。食生活なら早めの改善が必要。体质なら薬による治療をおこないます。ただし生活習慣病を併発している場合もあり、注意が必要です。

ドクターが
教える!

病院

との上手な付き合い方

【血液検査】

多くの人にとって身近な血液検査。

体への負担は小さく、それでいて深刻な病気の発見にもつながる大切な検査です。

血液検査の最新事情や知っておきたいポイントを、総合内科専門医の團茂樹先生にお聞きします。

取材協力: ティーベック株式会社



監修 團 茂樹先生

宇部内科小児科医院院長。総合内科専門医、医学博士。1982年日本大学第一内科大学院修了、カナダ州立オンタリオがんセンター留学、那須中央病院内科部長、千代田漢方クリニック院長を経て現職。東洋医学にも詳しく、ていねいなスクリーニングによる漢方薬の処方に定評がある。

Graphs / PIXTA (ピクスタ)



技術の進歩でさまざまな病気がわかるようになります

全身をくまなく巡り、生命のため多くの重要な役割を果たしている血液。だからこそ血液は健康状態を示す豊富な情報(?)を含んでおり、それらをキャッチするのが血液検査です。そして、その技術はますます進歩。「たとえば、がん検診の方が変わってくるのではないでしょう」と團先生。

血液検査の多くは専門の検査会社がおこなう

昨今、医療機関のほとんどが検体(血液)分析を専門の会社に委託。中には個人医院と総合病院の委託先が同じ会社のこともあります。そのため医療機関の規模と血液検査の精度に、関連性はありません。ただし、中には院内に外部委託の検査部門を備えているところもあり、至急の場合は採血当日に結果を出してくれます(一部例外あり)。



「その一方で、あまりにも早期だと、この検査は、遠からず実用化(保険適用外)され、さぞぞっと報道されました。内視鏡検査が苦手な人々にとって、血液を用いたがん検診は朗報といえます。また、X線による被ばくを避けられる点もメリットです。

うした最新の検査でがんの存在がわかつても、状態を詳細に把握するための画像検査には現れない場合も。そうなった時、診断や治療方針の判断は非常に難しくなります」それでも早く見つかれば、悪化を防げる可能性も。技術の進歩に、今後も大きな期待が寄せられています。

「国立がん研究センターでも、1ヶ月の血液中のマイクロRNAから、食道がんなど13種類のがんを早期発見できる検査を研究中です」